

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 29 日現在

機関番号：34509

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350766

研究課題名(和文)身体性とモラルの関係性 - 山崎闇斎の教育思想を中心に -

研究課題名(英文)Relationship between physicality and moral mainly Yamazaki Ansai's Educational Thought

研究代表者

西脇 満 (Nishiwaki, Mitsuru)

神戸学院大学・共通教育センター・教授

研究者番号：40461016

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：日本人のモラルの基礎となる武士道は武士の忠誠の思想や行動様式そのものでもある。そこで本研究は朱子学で武士道の理論的基盤を提供した山崎闇斎とその学派における身体性とモラルの関係を解明した。

闇斎の思想は朱子学は弟子の浅見綱斎、神道は孫弟子の若林強斎を通じて把握できる。綱斎は講学と武芸の実践で忠誠を高めることを、強斎は日常の祈りと祓いによって心身を清め、君臣一体の天の理を体認することを強調した。これらは闇斎の教えを基礎としており、後に明治維新を果たした志士たちにも大きな影響を及ぼし、日本人の精神性に根付いたとの確信を得た。今後は国学や水戸学を淵源とする日本人のモラルについても研究を進めたい。

研究成果の概要(英文)：Bushido that is the foundation of Japanese morals is also a philosophy of samurai's loyalty and behavioral style itself. Therefore, this study elucidated the relationship between Yamazaki Ansai's thought who provided the theoretical foundation of Bushido and morality. Thoughts of Ansai can be grasped through Asami Keisai and Wakabayashi Kyosai, who were Disciple of Ansai. Keisai taught to increase loyalty through study and martial arts. Kyosai emphasized purifying the mind and body and recognizing the doctrine of heaven through everyday prayers and exorcism. These are based on Ansai's teachings and have had a great influence on the samurai who later achieved the Meiji Restoration. And I gained confidence that this teaching was rooted in Japanese spirituality. In the future I would also like to conduct research on Kokugaku, that was National Science and Mitogaku that were origine of Japanese Moral.

研究分野：スポーツ哲学

キーワード：モラル 身体性 朱子学 神道

### 1. 研究開始当初の背景

近年の世界的な日本ブームを呼び起こした要因の1つとして、日本人の高いモラル、あるいは道徳性が各国から賞賛されていることがあげられる。本来、道徳性といえば、新渡戸稲造が名著「武士道」の中で明かしているように、西洋人にとっては宗教(キリスト教)と表裏一体であり、それはすなわち悪行を行えば死後に地獄に送られるので、善を實踐して天国に行かねばならないという人生観、あるいは人間観がある。しかし新渡戸が指摘しているように、本来キリスト教的素養のない日本人にとって、道徳あるいは道徳教育は西欧のように宗教教育と決して表裏一体ではない。新渡戸は日本人の道徳心の根源に武士道があると喝破したが、武士道は宗教ではない。つまり日本人は死後に地獄に落ちないようにという観念故に善行を行うのではなく、価値観あるいはモラル(ここでは武士道)を何の打算もなくただありのままに受入れている。ではなぜ宗教的観念抜き、あるいは弱い状態にありながらも高いモラルを持ち得るのかと言えば、それはただ良心故にとしか説明のしようがない。つまり日常生活で善行を行うには、その善行をやりたいと思う良心がなければならぬわけだが、それは知識として教え得るものではないだろう。知識とその人の行動を規定する価値観は決して同一のものではないが故に、人は時に自己犠牲の行動をも実践することができる。

そのような人間の行動については孔子・孟子を始祖とする儒教、さらには中国宋代に朱子が築き上げた朱子学に詳しく教えられている。日本に儒教が伝来したのは6世紀に王仁を通じ、あるいは一説にはそれ以前という見方もあり、また朱子学は鎌倉時代に伝来したとされている。しかしそれが一般に普及したのは、やはり江戸時代になって徳川幕府が官学として朱子学を奨励したことが大きな契機になったと考えられる。江戸時代には数多くの儒学者、朱子学者が活躍しているが、この朱子学本来の教えを究極まで突き詰めたのが山崎闇斎とその学派だろう。日本では科学が採用されず、比較的自由に学問が行われたことから、朱子学に批判的な学説も数多く登場しているが、闇斎は朱子の教えを固くまもった。この点について井上哲次郎は「日本朱子学派の哲学」(1905)の中で「(闇斎の)著述は朱子や程子の説の繰り返し」と指摘しているが、その一方で「幕末における影響は多大」と認めている。また阿部吉雄は「日本朱子学と朝鮮」(1965)の中で「朱子の学問や思想そのものを深く追求した学者、思想家としては日本の第一人者」と評し、その教えは「日本人の学問観の基礎」になったとしている。

史実から見ても崎門学派と呼ばれる闇斎の弟子たちには浅見綱斎など、幕末の勤皇思想の出現に大きな影響を果した人物が数多くおり、その影響力は井上も指摘するよう

に多大であったのは間違いなく、その後も明治・大正・昭和にかけて多くの日本人の心をとらえていた。

闇斎は単に知識として朱子学を学ぶことを嫌い、日常生活の實踐の中で自らの心を純化することを教えた。そこからモラルを関連付けられた「身体性」というキーワードが浮かび上がり、これが現代においても間違いなく生きているという仮定、あるいは前提の上に、本研究においてはその具体的な関連性について解明していくものである。

### 2. 研究の目的

本研究は、江戸時代中期の朱子学者・神道家である山崎闇斎の教育思想を手掛かりに、身体性とモラルとの関係について解明するものである。具体的には次の内容を明らかにする。

1) 現代の個別の活動様式に込められた価値、あるいは現代的価値に伴う立ち居振る舞い

2) 五倫(父子・君臣・夫婦・長幼・朋友)の前提となる身体性との関係性

3) スポーツなどの活動様式による敬の實踐

### 3. 研究の方法

平成26年度

山崎闇斎、朱子、李退溪、浅見綱斎などの文献の中から「身体性」と関連のある内容を抽出する。もちろんこれらの著書は膨大だが、筆者はすでに闇斎や李退溪、浅見綱斎の重要文献に関しては何度も熟読しているため、計画に問題はないと思われるが、朱子に関してはすべての文献を精査するのはおそらく不可能なため、闇斎や退溪の著書に引用されている部分を中心に出典の確認を中心に行う。

またこれらの文献の原典はもちろんほとんどが漢文であり、本意を取り違える恐れがある。しかし幸い闇斎の主要著書はその全集などに書き下し文があり、また李退溪に関しては韓国ソウルの退溪学研究院からハングル訳が出版されている。そのためまずはこれらを参考に、原典を確認する方法で文献の検討を行う。

浅見綱斎に関してはその主著である「靖献遺言」を中心に検討を行う。靖献遺言は中国の偉人について紹介したもので、その行動や思想などについて綱斎は詳しく説明している。これももちろん漢文で書かれたものだが、幸いやはり解説書や書き下し文などが数多く出版されているため、異なった解釈に陥ることがないようにまずはこちらを参考に意味を把握し、その上で原典を確認する手法を採用する。

これらの文献は「身体性」あるいは「身体」をキーワードに検討を行う。例えば闇斎では

朱子の「敬斎箴」に解説を施した「敬斎箴講義」、静坐の重要性を説いた「三子伝心録」「文會筆録」などが中心となるが、どの著書においても閻斎の儒学関連の主張は一貫しているため、他の主要著書においても「身体性」について直接の言及はなくとも、それとつながった部分（例えば空理空論を排撃して日常生活での体認を重んじる点など）は明らかに「身体性」と関連付けることができる。今回はこれらの部分についてもじっくりと精査したいと考えている。

また閻斎は李退溪の著書を賞賛している。一説では閻斎は李退溪に学び私淑したとの見方（阿部吉雄）もあるが、阿部自身も指摘するように朝鮮で重要視された退溪も著書の中で何度も言及している四端七情論などの觀念論に閻斎はほとんど関心を示していない。むしろ閻斎は退溪の言説を「評価」するという立ち位置で文献を検討しているが、もちろん退溪の賞賛すべき点については賞賛を惜しんでいない。とりわけ朱子の白鹿洞書院掲示についての退溪の解説を閻斎は非常に賞賛するなど、少なからず影響を受けたこともまた間違いなく、実際に空理空論を排撃して日常生活における実践を重んじるその姿勢は非常に共通している。また藤原惺窩や林羅山など、江戸時代の儒者には閻斎よりも先に退溪の著書に触れた影響力のある人物もあることから、閻斎はもちろん日本の朱子学全体が退溪の影響を受けているのは間違いなく、そのため退溪の著書についても重要な検討の対象とする。

#### 平成27年度から28年度

日本人の立ち居振る舞いについて複数の著書を発表している矢田部英正氏は大学（筑波大学）の後輩でもあるため、かつての共通の指導教授である筑波大学の佐藤臣彦名誉教授の協力と指導を仰ぎながら、東京在住の矢田部氏へのインタビュー、さらにその著書に記載されている立ち居振る舞いの実地調査などを行う。

具体的には個別の動作としては歩き方、座り方と立ち方、食作法、呼吸法についてその著書に記された内容についてさらに具体的にインタビューを行う。それらがいかなるモラルとつながっているのかについてはやはり仮説の域を出ないので、それらの立ち居振る舞いが日本人のモラル形成に如何に影響を及ぼしたかという逆の観点から、佐藤名誉教授の意見も参考に検討を進めていきたい。

#### 平成29年度

これまでの知見に基づき、この年度には主にスポーツを行うことにより習得される価値観や行動様式について整理すると同時に、実際の論文作成を進める。良い悪いを別にして身体性がモラルの形成に影響を及ぼすのであれば、スポーツはうまく活用すれば間違

いなく日本人の道德心の形成にプラスに寄与するのは間違いない。そのような観点から今後のスポーツ教育の方向性を示すというかなり壮大な方向性をも見据えながら、モラルと身体性との関係を論文としてまとめていきたいと思う。

#### 4. 研究成果

山崎閻斎とその学派における身体性とモラルの関係を調べるにあたり、丸山真男が『閻斎学と閻斎学派』で「閻斎の残した歴大な文献にもかかわらず、その中で通常の意味における「著作」と称すべきものの占める比重はいちじるしく低い。量的にいってもっとも大部な『文會筆録』二十巻の大部分が『朱子語類』『朱子文集』『学庸或問』『中庸輯略』その他程朱門の諸著や、朝鮮の李退溪集、さらには二十四史から雑家までの広汎な書籍引用から成っていることがまさにその徴証であり、その中で閻斎の直接的見解は章節の末尾に「嘉謂」とか、「嘉按」とかいう書出しではじまるパラグラフに時たま窺えるのみである」と指摘したように、実は閻斎の思想を閻斎の著述からうかがい知るのには難しい。そのため丸山は「つまり閻斎の学問と思想は、基本的には閻斎の門弟の媒介を通じてしか開示されないのである。そうしてこれと同じパターンが綱斎とその高弟若林強斎との間に一中略一というように順次反復される」としている。この丸山の指摘に従い、閻斎の朱子学については浅見綱斎、神道については若林強斎を参考に説明を進めた。

綱斎は人間の本性から来る仁は孝よりも忠にこそより高い次元で表れると説いた。なぜなら孝は親子関係という肉親の情によって自然発生的に出てくるものだが、忠を捧げるべき主君とはあくまで君臣の関係であり肉親ではない。そのため忠はあくまで義によってつながる関係であり、それには人間の心の奥底から来る「愛したい」という情、つまり仁を体現しなければ真の忠は発現しない。それを説明するため閻斎は『拘幽操』を賞賛したが、綱斎も強斎もこの師説に忠実に従っている。この忠を発現させる人間の本性こそまさに仁ということになるが、この本性に対する素直な態度こそ日本人のモラルの根本ではないかと筆者は考える。

綱斎は講学と武芸の実践で忠誠を高めることを、強斎は日常の祈りと衾によって心身を清め、君臣一体の天の理を体認することを強調した。これらはいうまでもなく閻斎の教えを基礎としており、後に明治維新を果たした志士たちにも大きな影響を及ぼした。たとえば吉田松陰は綱斎の『靖献遺言』を読んだ時の感動を「野山獄文稿」の「同囚富永彌兵衛に與ふる書」に書き残している。このような忠の体現、仁の体現こそ日本人のモラルの淵源であるのは間違いないと思われる。た

だそれにはさらなる論証、さらには実際の立ち居振る舞いに基づく研究が必要になる。計画ではそれも念頭に置いていたが、闇齋、綱齋、強齋の思想を調べることで多くの時間を費やしたため、当初の研究目的 2) についてはその端緒は得られたが、1) 3) についてはいずれも全うできなかった。ただしこれらを解明する糸口には到達できたと確信するので、今後は闇齋学派と並んで日本人のモラルの源泉になったと思われる国学や水戸学についても同時に研究を進め、今回の計画の中で遂行できなかった部分、とりわけ現代日本人のスポーツを含む活動様式に込められた価値の側面について引き続き研究を進めていきたい。

(2) 研究分担者 ( )

研究者番号 :

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号 :

(4) 研究協力者 ( )

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
出願年月日 :  
国内外の別 :

取得状況 (計 件)

名称 :  
発明者 :  
権利者 :  
種類 :  
番号 :  
取得年月日 :  
国内外の別 :

〔その他〕

ホームページ等

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

西脇 満

( Nishiwaki Mitsuru )

機関 : 神戸学院大学

部局 : 共通教育センター

職名 : 教授

研究者番号 : 40461016